

## 西王母文学の流れ

大塚 秀 高\*

### 一 水月観音と魚籃観音

中野美代子<sup>1</sup>によれば「玄奘取経図」とされる壁画が安西の東千仏洞第二窟の南北壁ならびに榆林窟第二窟西壁北側の「水月観音図」と榆林窟第三窟西壁南側に描かれる「普賢変図」のなかに見つかっており<sup>2</sup>、いずれも水域をはさみ観音菩薩を遥拝すると思しき僧とサルと馬を描いているという。僧を玄奘、サルを悟空とみたものであるが、この比定に異議をとなえる者はあるまい。では観音菩薩を彼岸に、玄奘と悟空を此岸に置くこの水域は何か。中野美代子はこれを海とみて、もと水月観音のもとへ取経に赴くという話が語られたことがあったが、観音の居処たる補陀落が南海であるため西天取経との間に矛盾が生じ、その話は削除された。そのなごりが『大唐三蔵取経詩話』の「入竺国度海之處第十五」にみえる「度海」ではないかと述べた。筆者は、いずれの壁画も安西及び榆林という内陸の石窟に描かれたものである点に鑑み、中野説のこの部分には同意できないのだが、その中核たる、「もと水月観音のもとへ取経に赴く」という話が語られたことがあったが、観音の居処たる補陀落が南海であるため西天取経との間に矛盾が生じ、その話は削除された」という点については、その通りではないかと考えている。

では筆者はこの水域を何とみているのか。一義的にいえば、東千仏洞や榆林窟が面して開削されている疏勒河や踏実河であったに相違ないと考える。上記の壁画群は、石窟中に描かれた

観音菩薩を疏勒河や踏実河の対岸から遥拝するイメージにより描かれたものであったろう。とはいえ、洞中にあかりでも燈さない限り、その壁画が実際に対岸から見えたとは到底思えない。筆者がここでわざわざイメージと述べたゆえんである。だがそうしたイメージの壁画を描くにはそれなりの理由があったはずである。その理由を考察する中で思い至ったアイデアが、『西遊記』はそもそも水月観音のもとへ取経に赴くというものであって、上記の壁画群はその場面を安西の東千仏洞や榆林窟に具現化したものであるとする、かつて筆者が述べた説であった<sup>3</sup>。

筆者はこの水域を、西天取経の道の半ばに移される以前の原通天河（溺水河）とみている。むしろこの「玄奘取経図」に反映している『西遊記』は今日我々が目にする『西遊記』とは異なる<sup>4</sup>。取経の目的地も如来の靈鷲山雷音寺ではなく、観音菩薩の落伽山だったはずである。

そもそも玄奘が西天取経を決意したのは観音菩薩の誘掖があったからであった。否、『西遊記雑劇』によれば、毘盧迦尊者が下凡した玄奘が生後まもなく江に流された時、龍王に命じてこれを庇護させたのは観音菩薩であった（第一巻第一齣「逼母棄児」）。その一方、玄奘が西天取経の旅において遭遇する諸難の多くは観音菩薩が太上老君に依頼したり、自身もしくは自身に有縁の者に仕掛けさせたりしたものがもともとその大半を占めていた<sup>5</sup>。『西遊記』の第99回に玄奘一行を蔭ながら護衛していた揭諦らが靈鷲山から歩いて観音菩薩のもとにむかったとの記述があるが（有五方揭諦……走向観音菩薩前）、

\* おおつか・ひでたか  
埼玉大学教養学部教授 中国俗文学

中野の説くごとく、如来の靈鷲山と観音菩薩の落伽山はもともと方角が異なり、歩いてゆけるはずがない。このことは玄奘の旅の本来の目的地が靈鷲山ではなく落伽山であったことを強く示唆していよう。掲諦らはそこで、玄奘のへた災難が八十で、九九八十一の一つ足りないからと、災難の追加を指示される。かくて掲諦は一行を保護し雲に乗せて長安に向かう途中の八金剛に追い付き、これに命じて一行を通天河の西岸に降ろさせ、通天河の主の鼈を再度登場させ、第八十一難を実行させるのである。しかく観音菩薩は西天取経の実際のプロモーターであった。現在の『西遊記』にみえる、如来が発議し、人選のみ観音菩薩が担当するとの設定は、観音菩薩の上に如来を「加上」した結果にすぎまい。では「加上」はいつの時点でなされたのか。それをいつと明らかにすることは難しいが、大いに天宮を鬧がした悟空が如来により五行山下に押さえつけられる情節が『西遊記』に導入されたと同じ時点だったことは容易に推察される。

ひるがえって先の「玄奘取経図」の水域をはさみ観音菩薩を遥拝する僧とサルと馬の図であるが、筆者は、馬の背に経がなければこれから水域を渡る往路の、経があれば再度川を渡っていよいよ帰途に就く場面を画いたものとみている。しからばこの水域は『西遊記』でいえば凌雲渡に相当しよう。

『西遊記』で玄奘の一行は帰路ひとまず雲にのって長安に飛ぶことになっている。だから帰路には凌雲渡を渡らない。しかし「玄奘取経図」に反映している『西遊記』では帰路も凌雲渡を渡ったろうし、九九八十一の数を満たすため追加された一難を果たすため通天河の西岸で降ろされることもなかったろう。なぜならこの当時の『西遊記』では靈鷲山の麓の凌雲渡と西天取経の旅の半ばの通天河は分割されておらず、靈鷲山の麓にあって、いわば原通天河（天竺に通

ずる河）とでもいうべき存在であったと考えられるからである。その根拠としては、通天河の妖怪靈感大王が観音菩薩の蓮池の金魚の精であって、これを観音菩薩は裏山の竹を斬ってこしらえた竹籃で捕え、その場で魚籃観音の姿を現したことがあげられる。つまり『西遊記』の魚籃観音は「玄奘取経図」の水月観音が変化したものだったのである。

## 二 観音菩薩と西王母—溺水河と弱水

江蘇省の南通市を中心に現在も行われている宗教演劇に童子戯がある。そのもつともポピュラーな劇目群を「十三部半巫書」というが、その一つである『西遊記唐僧取経』に次のような一節がある。

過了火焰山一座	溺水河到面当迎
説起此河多古怪	鵝毛落水往底沈
唐僧説道怎麼好	無橋無渡怎行程
師徒正在為難処	水内余出癩鼈精
癩鼈能吐人言語	叫声師徒你放心
你到西天去見仏	我渡師徒過河心
四人聽說上了渡	見仏回来有封贈
癩鼈馱到河中間	便把師父叫一声
你去朝拜如来仏	託你問問仏世尊
我今在此八百載	要求仏爺討封贈
唐僧説道我曉得	鼈精轉身向西行
一直行到西灘上	師徒四人動了身
耳邊聽得鐘鼓声	八戒説道有把程
一路行程来得快	雷音寺到面当迎
唐三蔵帶衆徒們	串成十字伝真經

これによれば、この溺水河には橋も渡し船もなく、通天河の老鼈にあたる癩鼈精が住んでいて、一行を背に載せ直接雷音寺まで運んでいた。もちろん帰路にも玄奘一行をその背に載せたが、往路での依頼がないがしろにされたと知り、河

の中ほどで黙って沈んでしまった。つまりこの溺水河こそが原通天河であって、癩鼈精は通天河の鼈と凌雲渡の接引仏祖を一身に兼ねた存在だったのである。

ところで、南通の童子戯の劇本に『鄭三郎成仏伝本』と題されるものがあり、「十三部半巫書」とならび童子から特別視されている。還願戯とされるから、願が叶った際に奉納される童子戯の劇本だったに相違ない。別名を「做願」、「鄭三郎上西天」、「領性了願」などとするゆえんである。以下にそのあらすじを記そう。

目連は母を救うため禅杖で十八層地獄をこじ開け、十万八千の嚎啕鬼をブタとしてこの世に舞い戻らせてしまった。目連は仏の指示に従い、蘇州の鄭家に托生し、鄭三郎となった。三郎は博打で身を持ち崩したが、妻の張鳳英によって改心し、妻の実家から借りた二百両を元手にブタ殺しを始め、商売は日ごとに繁盛した。ある日の夜中、三郎が母ブタを殺そうとすると、五匹の子豚がやってきて、母ブタの身代わりになって養育の恩を返したいと訴えた。三郎は頓悟して、天齊王廟の王法師を師にあおぎ、一心に仏を拝した。三年後、観音のお告げにより、三郎は父母妻子と別れ、王法師とともに西天に旅立つ。観音は紅孩児と龍女を伴い美女に化けて二人に試練を与える。王法師は試練に負けて虎に食われるが、三郎は西天に辿り着き、遂に成果を得た。

この『鄭三郎成仏伝本』は大きく三つの部分に分かれる。鄭三郎の博徒時期、ブタ殺し時期、西天への旅を中心とする修行時期がそれである。このうち、『西遊記』に通ずるという点で注目されるのは、最後の修行時期である。観音の出現が西天への旅の契機となる点は『西遊記』その

ままであるし、観音がお供の紅孩児とともに美人に化け、二人の意思の堅固さを試す趣向は『西遊記』の「四聖」の段そのままである。『西遊記』では一行が四人となっているため、黎山老母が母親に、観音、普賢、文殊の三菩薩が三人の娘に化けるが、『鄭三郎成仏伝本』では一行が二人であったため、観音と紅孩児で足りた。いうまでもなく、王法師の役割は『西遊記』の八戒に相当する。

かくてただ一人虎に跨り西天への旅を続ける鄭三郎の眼前に弱水江が出現する。虎は鄭三郎を背中から振り落とし天に昇ってしまった。以下はそれに続く部分である。

鄭三睜開眼睛看	雷音宝寺隔条江
上無橋来下無渡	無橋無渡怎過江
観音老母雲頭叫	叫声修行鄭三郎
你是東土殺猪匠	身上污穢臭駢髒
弱水江中洗個澡	脱過凡胎上西方
鄭三聽得老母言	双脚一跳下大江
三尺浪頭漫頭過	屍首尅到江面上
真魂出竅来得快	来到西江岸頭上
鄭三回頭一搭眼	看見屍首漂水上
屍首果曾礙碰我	仏王知道罪難当
人説回頭不認屍	就是当年鄭三郎

この部分、『西遊記』の「凌雲渡」の段そのままである。凌雲渡には丸木橋がかかっていたが、悟空以外は怖気づき、誰一人渡ろうとしない。そこへ接引仏祖の操る無底船がやってくる。乗り込んでみたものの底のない船だったから、凡体の三蔵はたちまち水に落ちる。ところがひとたび水から引き上げられると今度は逆に沈まない。河の中ほどまでくると屍が流れてくる。なんとそれは三蔵の凡体であった。かつて筆者は、凌雲渡を彼岸と此岸を隔てる水域であって、西王母のいる崑崙を圍繞する弱水と同じものと

みて、弱水の弱から溺れるという発想が生じ、溺水河の名を得たのではないかと論じたことがある<sup>6</sup>。『鄭三郎成仏伝本』の存在はこの説の正しさを期せずして証明したといえよう。申すまでもなく、『鄭三郎成仏伝本』の鄭三郎は陳三蔵から変わったものであった<sup>7</sup>。

南通の童子戯の『西遊記唐僧取経』と『鄭三郎成仏伝本』を間に置くことにより、雷音寺を圍繞する河は、その水性が「鵝毛落水往底沈」であり、溺水河とも弱水江とも呼ばれる河であることが明らかになった。『西遊記』で鵝毛も浮かべないとされる河は沙悟浄のいた流沙河であるから、この溺水河、『西遊記』の通天河、凌雲渡、流沙河を一身に兼ねる存在だったのである。

閑話休題、ではこの唐すなわち中国から見て西にあり、観音菩薩の御座所を圍繞し、鵝毛も浮かべない河はなんだったのか。あらためて申すまでもなく、それは西王母の崑崙を圍繞する弱水だったに相違ない。つまり観音菩薩こそは姿を変えた西王母だったのである。

### 三 西王母とその娘たち

小南一郎はその「西王母と七夕伝承」<sup>8</sup>のなかで、西王母について次のように述べている。

古い農耕儀礼と結びついていたのであろう再生をくりかえす女神の伝承が“西王母”という名の神格に結晶し、その両性具有という形で示される絶対性が男神と女神とに分裂したあと、男女神の季節を定めた会遘（それを通じての宇宙生命力の再生）という儀礼的な筋書きを生み出した。それが更に、魏晉南北朝の社会の中で七夕の年中行事に変容し、儀礼的な筋書きも宗教的な色彩を払拭して、男女二神の恋愛譚として独立して発展していったのである。

中国の西陲にあって『山海経』の人間ばなれした姿<sup>9</sup>から美女へと変身を遂げた西王母と、人間の男性との交歡をテーマとする作品を西王母文学とよぶ時、西王母文学にはいくつかのタイプがあり、時代を反映した変遷があった。当初は、成年の落ち着いた女性の姿をとる西王母と人間界の帝王が会遘する形式のものであって、人間界の帝王が西王母を訪ねる部分がより強調された『穆天子伝』のタイプと、西王母が人間界の帝王を訪ねる部分に特化した『漢武帝内伝』、『漢武故事』のタイプに分かれていたようであるが、文学といえるほどの展開を見せるにいたらなかった『竹書紀年』<sup>10</sup>のように、たがいに往来するタイプのものもあったようだ。『西遊記』では観音菩薩が唐土にやってきて大西天天竺国大雷音寺の如来のもとにある大乘仏法三蔵を求めるよう太宗を誘掖し、太宗の御弟となった玄奘が西天に旅立つことになっており、『竹書紀年』に近いタイプのものともいえる。

ちなみに『漢武帝内伝』、『漢武故事』と『穆天子伝』の成立時期ならびに文献としての性格について、筆者は次のように考えている。『漢武帝内伝』、『漢武故事』は班固が作者とされているが確証はない。『穆天子伝』の荀勗の序は、それが太康二年に汲冢の古冢から出土したこと、その冢が魏恵成王の子今王の冢とみられることを述べ、それを踏まえ、これが太康二年の少なくとも五百七十九年以前に成立していたと論じている。だが出土状況からみて、それが信賴するに足るものかには疑問符がつく。したがって、筆者はいずれについても後漢あるいは六朝時期に成立した作者不明の文献であって、史実を記録したものではなく、おそらく方士によって著された、女神と人間の男性との会遘をテーマとする文学作品であって、筆者のいう西王母文学の嚆矢をなす作品とみている。以下では『漢武帝内伝』を中心に議論を進めることにしたい。

『漢武帝内伝』の梗概を改めて示すことはしないが、以下の議論を円滑に進めるため、筆者がそこにおいて注目している点を以下に掲げておこう。

- ① 西王母が七月七日に武帝のもとを訪れていること。
- ② 元始天王より伝えられた長生の要言を伝授したこと。
- ③ 上元夫人を同席するよう招いたこと。

まず西王母が七月七日に武帝のもとを訪れる点であるが、これは両者が後世の織女や牽牛の先蹤であることを示している。次に西王母より武帝に伝授される長生要言の「作者」元始天尊であるが、後に道教の三清の一人となる元始天尊、あるいは男の神仙の総元締めとされる玉皇大帝の原型であって、後に女の神仙の総元締めとなる西王母と並び立つ、いわば牽牛に比せられる存在とみなせる。最後の上元夫人であるが、それが後の西王母の娘たちの魁であることも見やすい事実であろう。つまり、『漢武帝内伝』には後にそれが織女と牽牛の伝説に移行するための萌芽がすでに見えていたのである。

小南一郎の研究によれば、後漢の頃から墓室の東壁に、西壁の西王母の対偶神として東王公が出現するようになり、時をへて両者が一年に一度、七月七日の夜に鵲の両翼を渡ってその背中で会遊を果たすようになっていったとされる。天界に対偶神たる東王公が新たに創出された以上、西王母自ら下界にやってくることは困難になったはずである。按ずるに、東王公は神話の世界にも男性原理が優勢となりつつあった時期に、それまでは主神であった西王母が、その大地母神としての「機能」を果すため、下界に男性原理の体現者、すなわち人間の男を求めてあくがれでてゆかぬよう考えだされた存在だったはずである。筆者は小南一郎と異なり、西王母を両性具有の存在と主張する気はない。『穆天

子伝』や『漢武帝内伝』といった文学作品の世界では、両性具有の存在であるというより女媧のごとき大地母神であったからである。しかし女媧に伏羲という対偶神が現れると同時に、その補天、造人に象徴的に示される、天地ならびに人類の創造者の地位が奪われたと同様、西王母も東王公にその地位を奪われることになったと思しい。かくて東王公は天帝に出世することになり、反対に西王母は女神の総元締めとは名ばかりの、自由を奪われた籠の鳥となったのである。ただしこれは後世の道教のヒエラルキーが確立された時期のことであろう。

こうした神話的地位の後退の最中にあり、本来自身が果たさねばならない、宇宙の生命力を更新させるため、自らのイニシヤチブにより男神と季節を定め会遊することが出来なくなりつつあった西王母がとった方法、それが自身織女という名の少女に変身し、人間の男（牽牛）と会遊するというものであったり、自身の分身たる娘たちを地上に送り込み、かつてのごとく会遊の相手を人間界に求めるというものであったりしたのではあるまいか。おそらく、大地母神一人ですべては事足りると考える時代ははるか昔に終焉を迎えていて、西王母のもつ陰の気のみでは世界が活性化せず、その本来の宇宙の統治者たる役割を十全に果たすには、常に新たな陽の気を導入しなければならないという考えが支配的になっていたのであろう。そうした時期の西王母文学としては、前者に敦煌から発見された「董永変文」や敦煌本『搜神記』の「田崑崙」が挙げられ、後者に唐代伝奇や宋代の説話四家の一つである小説の台本を取めた『新話摭粹』にあって遇仙類などに分類される作品が挙げられよう<sup>11</sup>。

その後西王母文学は新たな発展を遂げる。西王母の分身たる娘たちが楊家将、薛家将、呼家将などのいわゆる家将小説における女将へと変

身したからである。家将小説の女将の多くは「陣前比武招親」をする。その情節はおよそ以下のようなものである。

中国から周辺諸国一多くの場合中国の西に位置する一に遠征してきたイケメンの若武者を、武芸と兵法を授けてくれた師匠の女仙ないし女神から特殊なアイテムを拝領し、姻縁に関する示唆を受け待ち受けていた女将が一騎打ちで捕え、これに自ら婚姻を迫り、最後はその目的を達する。しかも、こうした女将は、男将が若くして戦死した後も、自らの生んだ次代の男将を盛り立て、あたかも不老不死の存在のごとくにふるまうのが常であった。たとえば穆桂英や樊梨花がそれである。このタイプの西王母文学は、男将による征伐（西征）がまずあって、それを迎え撃つという形で出陣してきた女将により「陣前比武招親」が発動されるから、『西遊記』とは逆の、『穆天子伝』+『漢武帝内伝』のタイプということになるろうか。女将の師匠たる女仙ないし女神が西王母であることは言を俟つまい<sup>12</sup>。

西王母文学の作品として次にあげるべきは、いわゆる才子佳人小説であろう。明末清初に澎湃として巻き起こった才子佳人小説のブームは、才子佳人の結婚を共通テーマとし、佳人の男装と才子の双嬌斉獲をその大半に見える趣向としつつ、あまたのバリエーションをもって語られた。よって以下に紹介する情節はあくまでその代表的なものであるが、これにより他を推して知ることは出来よう。

すなわち、父兄のいない佳人が嫁ぐ相手を自身で選ばうと考え、集めた才子に題を与えて詩を作らせ、自身は御簾を隔ててその様子を窺い、これと思う相手を定めるが、その才子は科挙に応募べく都に旅立ってしまう。男装してその後を追った佳人であったが、男装のゆえに男と間違えられ、別の佳人と結婚せざるを得なくなる。

佳人は床入りのおりに女であることを打ち明け、同時に思う才子に嫁ぐこと申しでる。かくて科挙に合格した才子はなんの苦労もなく二人の佳人を双嬌斉獲することができた、と。

これもいわばうれしい押しかけ女房の一種であって、「董永変文」の織女や宋代の芸能たる小説の遇仙類にみえる仙女、家将小説の女将とかわるところはなかった。違いといえば、佳人に母親はいても、到底仙女の母親たる西王母や、女将の師匠たる女仙・女神には類えられない、無力な存在になりさがってしまった点であろう。西王母神話が没落した結果、その替身たる存在も才子佳人小説では姿を消してしまったのである。

#### 注

- 1 「敦煌石窟群の《玄奘取経図》壁画—とくに東千仏洞と榆林窟—」(『図書』2000-3 所収、2000.3)による。
- 2 東山健吾『敦煌三大石窟 莫高窟・西千仏洞・榆林窟』(講談社、1996.4)によれば、榆林窟第二十九窟の水月観音図中にも唐僧玄奘の取経説話に関する図像が存在するという。ちなみに東山によれば、榆林窟の第二窟、第二十九窟は「西夏(元・清重修)」、第三窟は「西夏後期(元・清修)」とされる。
- 3 拙論「通天河はどこに通じていたのか—『西遊記』成立史の一齣—」(『埼玉大学紀要 教養学部』38-2 所収、2003.3)を参照されたい。
- 4 本稿でいう『西遊記』は、現存最古の百回本世徳堂本に、それ以前の『西遊記』には存在していたことが明らかな、三蔵法師の出自を語る「江流和尚」の部分を加えた仮想のテキストをさしている。筆者はかつて本稿でいう『西遊記』と同じものを「現存最古の百回本世徳堂本に先行し、三蔵法師の出自を語る「江流和尚」の段を備えていたと考えられるテキスト」としたが、そのテキストの「江流和尚」部分以外が世徳堂本と同様だったとは限らない、否、おそらく異なっていたと考えられるので、今後はこのように言い換えることにしたい。なお、『西遊記』には百回本以外に簡本と称される、難の数を減らし描写を簡略にしているテキストが二種存在している。「江流和尚」部分の存否を別にすれば、百回本相互

- の間、ならびに簡本の省略されたものを除く諸難の排列は基本的に同一であるが、一行が西天に到達した後、八金剛より観音菩薩に提出された、一行のへた諸難を列挙する歴難簿の排列が、本文のそれと異なるものがある。これが上記の『西遊記』の様相を反映するものである可能性が考えられる。なぜなら、李卓吾先生批評本と清本『西遊記』は本文の通りの歴難簿を掲げているのに、世徳堂本は本文と異なる順のそれを掲げているからである（簡本には歴難簿がない）。世徳堂本系統の明本は、本文の難の排列をそれ以前に存在していたテキストから現状のように改めたが、歴難簿についてはうっかり従来のものを襲用してしまった可能性があるのではなかろうか。なおこの歴難簿の相違に最初に言及したのは上原究一である。よって筆者による考察は上原の論文が発表された後に公表することにした。
- 5 拙論「鎮元子と太上老君一斉天大聖はなぜ土地廟に化けたのか」(『埼玉大学紀要 教養学部』37-1 所収、2001. 10) ならびに「福州平話西遊記から見る原『西遊記』」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』3 所収、2006. 3) を参照されたい。
  - 6 前掲註1の拙論を参照されたい。
  - 7 目蓮は『残唐五代史演義』では黄巢となり、人間となった嚎啕鬼を地獄に連れ戻すため大量殺人をするとき、『鄭三郎成仏伝本』ではブタとなっていた嚎啕鬼を連れ戻すためブタ殺しの鄭三郎となるのだが、『目蓮三世宝巻』(光緒二十七年刊本)では、鬼魂のみならず猪羊も阿鼻地獄から逃がしたため、最初黄巢となって鬼魂を、次に屠家の賀因となって猪羊の魂を回収することになっている。『目蓮三世宝巻』と命名される由縁である。なお、この宝巻では、目蓮が当初西天に母を尋ねる際、観音菩薩が善才(財)を女子に変え、自分は老母となってその真心を確かめる場面や、目蓮が「上面並無橋行走 下面又無擺渡船」の天河に行く手を阻まれ、河に飛び込んだところ凡体から脱離し、水面に浮かび上がった屍首を浮き袋に天河を渡って西天靈山に辿り着く場面がある。
  - 8 『中国の神話と物語り』(岩波書店、1984. 2) の第一章。『東方学報(京都)』第46冊(1974. 3)に同題で掲載された論文に訂正と増補を加えたもの。なおこの論文は全面的に書き改められ補正が加えられて同名の単行本となった(平凡社、1991. 6)。以下の引用は小南自身が第一章の内容を要約紹介している『中国の神話と物語り』の序章による(6p)。
  - 9 『山海経』西山経第二、海内北経第十二、海内東経

第十三、大荒西経第十六などに見える。

- 10 卷上に「九年、西王母来朝」、「十七年、王西征、至崑崙丘、見西王母。其年、西王母来朝、賓於昭宮」とある。
- 11 拙論『緑窗新話』にみる宋代小説話本の特徴―「遇」をめぐる―(『中国古典小説研究』7 所収、2002. 3) を参照されたい。
- 12 拙論「西王母の娘たち―「遇仙」から「陣前比武招親」へ―」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』8 所収、2011. 3) を参照されたい。